

高校進学ガイド(2)

高校の勉強 —最初の定期テストが大切な理由—

「中学では成績がよかった。受験でも第一志望校に合格した。だからきっと高校でもうまくやれるはずだ。」

この考え方、半分は「YES」ですが、半分は「NO」。

中学の勉強と高校の勉強の間には相当なちがひがあります。

受験で得た自信を生かして高校でも成果をあげるには、学習スタイルのモデルチェンジなど、それなりの準備が不可欠なのです。そのために、まず、高校の勉強のイメージをつかんでください。

Study・1 初回の授業からどんどん進む

入学した高校が国公立高校か、私立進学校か、私立付属校かによって、当初の学習の様相は表面的には異なります。たとえば、公立進学校なら皆一斉のスタートですが、私立進学校の場合は、内部進学の子ととの間にカリキュラムギャップがあるので、それを解消するためのプラスアルファの講義などを受けることとなります。では、私立進学校の方が大変なのでしょうか？

実はそうではありません。本当はみんな同じなのです。

今の高校は、私立であろうと国立であろうと現役合格を強く意識しています。しかも、第一の目標としているのは、国立大学に1人でも多くの合格者を出すことです。つまり、3年間で国立大学に合格する生徒を育てたいと考えているわけです。

このようにあとの日程が決まっていて、そこに照準を合わ

せると、各科目の授業の進行速度は逆算で自然に決まります。選択の余地はありません。だから、進学校に入学した生徒の学習ペースは、基本的に皆同じなのです。大変そうな感じがする一貫校の高入生のほうが、事態がはっきりと見えているだけ、かえっていいというべきでしょう。

付属高校だって、大差ありません。いま、「大学受験がないのだから、生徒をのんびり遊ばせてやろう」などという感覚の付属高校はひとつもありません。卒業生の質を厳しく問われる中で、それらの学校も生徒にはたくさん勉強させて、実力をおおいに伸ばしてもらおうと手ぐすね引いて待っているのです。

以上が、高校が最初の授業からどんどん勉強を進める事情です。新入生にとっては、すでに回っているメリーゴーラウンドに飛び乗るようなもの。絶対に油断してはいけません。

Study・2 中学とはレベルが違う

高校では、大学受験対象科目の5教科すべてが、中学時代より大幅にレベルアップします。中学はまだ義務教育期間ですから、日本国民なら知っていなければならないことを全員が理解できるように指導することを目標としています。各科の内容を基礎レベルにとどめ、指導するうえでも学習進捗状況を管理して、おちこぼれをなるべく出さないように気を使います。

しかし、高校はいくら進学率が100%近くなったといっても、勉強したい生徒が選んでくる場所です。より高いところをめざす意欲の旺盛な生徒たちに応える学習を提供しなければなりませんし、非常にシビアな言い方をすれば、やる気がなくて成果もあがらない生徒は落第させればよいのです。内容に遠慮はないのだと予め覚悟しておきましょう。

また、科目の中身を考えても、中学の初等英語、初等数学

が次の段階に進んで難しくなるのは当然として、国語でも古文や漢文を本格的に勉強しなければならなくなりますし、理科・社会も理解するのに苦勞する単元が増えてきます。

そう、高校の勉強は難しいのです。

普通の公立中学から受験を経て高校に入学してきた生徒にとって、多くの場合、英語力が命綱となります。相当な語数の長文読解や文法の難問、リスニング等に総合的に備えてきた受験勉強は、高校英語でも当初は十分に通用するレベルにあります。このまま英語を大切に得意科目に育てていかなくてはなりません。

逆に厳しいのは数学です。中学初等数学との連続性が強い、数I・Aをしっかりと理解しながら、そのプロセスで高校数学の雰囲気を取り取っていく必要があります。

Study・3 定期試験が大切

● 実力を反映する絶対評価

中学の成績は、試験結果に提出物、授業態度などの先生による印象点を加味した総合評価です。現在では絶対評価と呼ばれているものの、その実態は点数の割り振りを意識した相対評価に近い側面があります。

これに対して、大半の高校の成績は、定期試験の点数が圧倒的な重みを持ち、ほとんどそのまま成績になる、本当の意味での絶対評価です。

しかも、定期試験の内容は中学時代より難易度が高くなっていますから、学校の成績に実力がそのまま反映されると考えていいのです。わかりやすくいい制度ですが、そのかわり、成績不振に言い訳はできません。

● 受験結果と強い相関性

大学受験の世界で学校の成績がものをいうのは推薦やAO入試などですが、高校受験の公立入試のように内申点が入試

判定資料として大きなウェイトを占めるということはありません。にもかかわらず、高校の成績と大学受験結果の相関性はかなり高くなります。それは前述のように、学校の成績が実力を素直に反映しているからです。

したがって、受験に向けての勉強を考えた場合でも、自分の成績はある程度の指標になります。当面の目標は、学年で一ケタ台か、あるいは上位10%以内の席次としましょう。学校できちんと成果をあげていくことが、大学受験の基礎力を形作っていくことになります。

高校の勉強が興味深い反面、とても厳しいものであることはおわかりいただけたことでしょうか。では、どのように対処していけばよいのでしょうか？

以下の2項目はそのヒントです。

Study・4 授業時間を生かそう

● 授業時間をとことん生かす

いろいろな先生がいて、授業の進め方にも個性があるのが高校です。だから、自分にとって興味の湧く時間もあれば、必ずしもそうとはいえない時間もあるでしょう。

好きな時間は自然に多くを吸収できるものですが、問題はそうでない授業の受け方です。単純に捨ててしまったり睡眠時間に当てたりするのは効率の悪いやり方です。もっと柔軟に、自分の勉強の中でどう生かせるかを考えてください。授業をおろそかにして両立なし。これは真理です。

ある高校の時間割(1年)

	月	火	水	木	金
1時限目	現代文I	音楽	古文I	英語I	英語I
2時限目	生物I	英語I	化学I	世界史	化学I
3時限目	英語I	数学I	英語I	数学I	オーラル
4時限目	体育	数学A	体育	数学A	体育
5時限目	数学I	オーラル	世界史	生物I	古文I
6時限目	保健	世界史	保健	現代文I	化学I

(※ 1時限 50分のこの学校では、受験に関わりの深い主要教科(白マスの科目)の1週間の授業が合計20時間となります。この時間をなるべく生かすことが、充実した高校生活の基礎です。)

高校生活の実態を客観的に見ると…

平均的な高校生が日常的に取り組んでいる活動を整理してみると、次のような感じになります。

[授業]…月曜～金曜日まで、ほぼ毎日6～7時限の受講(終了は3時過ぎが一般的)。

[部活動]…人によるが、積極的に活動する場合は最低週2～3日、多ければ週末も含めてほぼ毎日というケースも。

[行事]…不定期だが、学校によってはかなりの長期にわたり熱心な準備などをするケースも少なくない。中心的なスタッフになったら超多忙。

[塾・予備校]…個人差がかなりある。以前は学年が上がるにつれて通塾率が高くなり、3年で跳ね上がるパターンだったが、最近は早い時期から週に1～3日程度通塾する高校生が増えてきた。

[自主勉強]…毎日一定時間の勉強が必須である。当然宿題も出る。

Study・5 最初の定期テストが分かれ道だ！

最初の定期テストの結果は、高校3年間と大学入試での成果を占う指標となります。

なぜ、そのようなことが言えるのでしょうか？

それは、次のような顕著な傾向が見られるからです。

- ① 高1の1学期(前期)のポジションはあまり変動しない。
- ② 時間が経つにつれて、学力の差はどんどん広がっていく。

下の図を見ながら、この意味を考えてみましょう。

まず①について、図中の3人の生徒は、高校というまったく新しい環境に投げ込まれました。そして、それほど日も経たぬうちに最初の定期試験を、まったく同じ条件で受けたわけです。そこでついた差は、学力+覚悟+適応力の結果であり、つまり本人の総合力がかなり正確に現れるのです。3年

間という長い時間の中で意外なほど成績の上下が少ないのは、このような理由に基づいています。

次に②に目を移しましょう。総合力に差があると、その差は単位時間あたりの学習成果に反映されるので、週毎に月毎に学力差が開いていくことになります。その開き具合は、中堅から下位では比例的なレベルに留まりますが、上位に行くほど加速度的になります。勉強が進んだ生徒は能力も意欲も高まるために、総合力が高速で伸びていくからです。学校では以前と同じポジションにいたとしても、実際には学力差がどんどん広がっていき、逆転不可能な状況に追い込まれていきます。ここに、高校の勉強の怖さがあります。

①・②を合わせると、なぜ最初の定期テストで10%以内にいることが重要なのか、納得していただけるのではないのでしょうか。

高校の順位と学力の伸び方

